
魔王と勇者のタクティクス

kamome23

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と勇者のタクティクス

【Nコード】

N7366X

【作者名】

kamome23

【あらすじ】

本が読むのが大好きな青年がいた。

そんな青年が突如穴に落ちた。

そこには、薄気味悪い塔には似合わない一人の少女がいた。

そして突然「私たち……魔王軍を救ってください」といわれ、

そして青年は返事をして……

勇者の役を買って出た青年と魔王の娘が作り出す。

とても壮大な戦略とは……！？

ハーレム要素がかなり強いと思うので苦手な方はご遠慮してく

だ
さ
い。

第一話 「てか…魔王の娘が勇者を召喚しちゃまずいだろー!」

俺の名前は、りょうは両羽 たくみ巧という。

学校行きながらも本を読み。

帰って来ても本を読むそんな生活を送っている。

ちなみに愛読書は「孫子の兵法」だ。

そんな読書好きでさらに戦略本や兵法書などをこよなく愛す。

俺は、時々生まれてきた時代を間違えてんじゃないかと思うときもある。

そんな俺は、今日も孫子を読みながら、学校からの帰り道を歩いていた。

「兵とは国の大事なりつてね、ああ一度でもいいからこんな時代に行って兵隊を使いたいな」

そんなことを考えて歩いていたため目の前に大きな穴があるのも気づかなかった。

「わあ~~~~」

そのまま俺は落ちて行った。

時は少し迫のぼり、

「えーとまずは、河童の涙に…」

薄気味悪い塔には似合わない水色の髪の少女がいた。

「えーと次は…竜の糞……うわくさ！」

周りには誰もいなくてただ少女が必死に何かの準備をしていた。

「あとは、この黄金をつと、これで勇者を呼び出せる。」

その少女は目が輝いていた。

彼女の名前はエリナ。

なんと魔王の娘。

「うんしょ、うんしょつとあと少しで完成する。魔法陣で勇者を呼び出して救ってもらわないと……」

エルナは、必死に混ぜて

「できた！」

ついにできたのだった。

それを周りに流し込んだ。

「よし完成した！」

周りには、紫色の魔法陣が描かれている。

「今ここに召喚の儀式を開始す。勇者を現世界へと呼びたまえ。」

上に大きな穴が開いた。

「わあ~~~~」

突然大きな声にびっくりはしたが、一人の男が落ちてきた。

「この人が勇者様……」

「いてて、なんだここは??」

周りを見渡すと、薄気味悪い石でできた部屋の中にいた。

「あなたは勇者様なのですか??」

可愛らしい少女が手を握ってくる。

「はあっ勇者!? 誰が!？」

タクミは、状況が呑み込めず。ただ突っ立っている。

「あなたがです」

「…俺が!!」

「そうです。」

「なんで??」

タクミは、いきなり勇者と言われても何のことかよくわかっていない。

「勇者を呼び出す儀式を行ったのです。」

「そうなのか」

エリナは、泣きそうな顔をしながら言った。

「私たち……魔王軍を救ってください」

「はあ~~~~」

その時タクミは、急に魔王軍を助けてっと言われて困惑して

「魔王軍を救う……?」

「はい、そうです。」

「え〜と何で?」

「私のお父様の魔王が、神族の裏切り行為にあい。死んでしまいました。そして今私が魔王の代理をやっています。」

「お前、魔王の娘なの!?!??」

タクミは、目の前のかわいらしい少女が魔王の娘なんて信じられなかった。

「はい、それで、そのために私たちは、最後の希望を託して勇者様をここに召喚したのです。」

「てか…魔王の娘が勇者を召喚しちゃうぞいだろ!!」

「確かに……」

顎に手を添えて納得したような顔になる。

「いまごろかよ……」

タクミはこのかわいらしい魔王様に呆れていた。

「しかし!そんなだけピンチなんです今は!!」

「どれくらいやばいんだ!？」

「魔王軍は、分散してしまい今私のもとにいるのは、たったの5千です。」

涙ぐんだ目で行ってくる。

「5千でもすごいな、もともとどれくらいいたんだ!？」

「100万です」

「はあ!100万!!どれだけ減っているんだよ!!」
100万という数字を言われてタクミは、腰を抜かす。

「ほめたり、怒ったりどっちかにしてください」

「いや、だって……なっ!」

「なに憐れんだ目で見てるんですか!」

「仕方ないだろうこんなこと聞いたんだから。」

エリスがタクミに詰め寄り

「それで助けてくれるんですか??」

「それは置いといてだ。もし俺が帰りたいと言ったら返してくれるのか??」

「それはちょっと……召喚はできたのですが、戻すのは……」
下を向いて返事をする。

「やっぱりな」

タクミはため息をついた。

「このまま、ここにいるしかないんだから協力してやろう!」

ものすごい喜んだ顔で

「本当ですか!?!」

「ああ」

「やったー!!これで百人力です」

手を挙げてバンザイのポーズを何回もしている。

「いや……ちょっと待て……俺は力なんて強くないし武術なんて少しかじったことがある程度だぞ」

自分の手を組んで広げる動きをして

「えっ……じゃあ、一撃必殺技とか、半径5キロメートルを焼き尽くせる魔法とかは?」

「おいおい、どんだけ勇者に夢見ているんだよ……」

「本当ですか!?!」

「本当だ。俺は腕っぷしは弱い!!ただし作戦を考えるのは得意だぞ」

「そうですか……しかし、ここで勇者を復活できたといわないと士気にも影響が出ますし……」

エリナが目をうるうるさせてきたのに負けた巧は

「わかった。わかったよ、勇者の役やってやるよ!!」

「嬉しいです!!」

エリナ踊っている。

「まあそんなに喜ぶなよ期待できるほど強くないんだから…」

「それでもいいです!!」

タクミは、何かを思い出して物ふけな顔をする。

「まあいいけど、置いてきた妹が心配だな」

「妹さんがいるんですか？」

「ああ、俺とは正反対の感じで、腕っぷしが強くて戦闘になったら真っ先に突っ込んでいくようなやつなんだが…いれば楽なんだがな」
「…」

タクミは四大家族で武道家の父親にアクション女優の母親から生まれてきた。

なんでこんな親から俺が生まれてきたのか不思議で仕方ないとタクミは思っている。

「召喚では、呼びませんし仕方ありませんよ」

「そうだな、まあいいや。それより目標は??」

「目標ですか??」

「そうだ。何事の居ても目標があったほうがいい」

エリスは、考えて

「それなら、静かで安全な場所を求めるっていうのはどうですか？」
「？」

「はあ…そんな甘いこと言わずにもっと大きな目標もてよ!!たとえばこの世界を奪ってやるとか」

「そんなのいやですよ!」

よっぽど嫌だったのか、語気が強くなる。

「つべこべ言わずにもう決定した。よし目標は…」

タクミは、エリスのことを少しだけ考えて

『世界をぶんどって静かな世界にさせる！！』

そうして、魔王と勇者が手を組んだ。

第二話 「全員、川に飛び込め——！！」

「世界をぶんどって静かな世界にさせるってなんですか！！」
エリナがとても怒ったような顔をしている。

「いやーだって、エリナ言っただじゃないか静かな場所を求めているんだろ」

飛んだり跳ねたりして髪を上下させながら

「そうですけど、それと世界をとるは関係ありません。」

「いや、手っ取り早い方法だ——！！」

タクミは押し切る。

「どこかですが——もういいです」
脹ふくれた顔になってしまった。

「そんな事よりエリナ今の魔王軍の状況を教えてくれ」

「そんなん聞いてどうするんですか——」

まだすねている。

「世界を取らないといけないからな——」

さげすんだ目で

「まだそんなこと言っているんですか？今は神族によって統治させられていて、それを人族が勝手に魔族を追い立てているんですから」
エリスの言葉や視線を無視し

「なるほどな！敵は神族か——！それなら人族を仲間にした方が手っ取り早いな！」

「何勝手に話を進めているんですか——！！」

「よし、これで倒す相手は、神族からだな。」

「もう人の話聞いてくださいよ！」
エリナが腕をぶんぶん振っている。

「まあそれより。この世界って魔法があるのか？」

「はいありますよ」

ちよつと語気がすねている感じに聞こえる。

「例えばどんなのがあるんだ？」

「そうですねー攻撃魔法から、防御魔法、補助魔法、儀式魔法なんかがメジャーですね」

そこらへんは俺のいる世界のRPGと変わりないな…

俺のいるじゃなくて俺のいた世界か…いって悲しくなる。

「なるほど、次に兵種は？」

次々とタクミが質問するがエリスは、仕方がないという感じで返答をする。

「今味方にいるのが、ゴブリンとかスケルトン、リザードにウィッチがいます。」

「それぞれの特性は??」

「えーと、ゴブリンが棍棒と弓が武器で……スケルトンは、防御が最弱だけど何回でも生き返れる。そして、リザードが頭がよくってウィッチが魔法使いって感じ。」

「なるほど」

ようするに、

ゴブリンが雑魚歩兵。

スケルトンがゴミ。

リザードが指揮官タイプ。

ウィッチが魔法攻撃って感じか……意外に心もとないな魔王軍…

「本当はまだほかにもいるけど、どっかに行っちゃった」

「それなら、これから仲間にすればいいことだから大丈夫だ。」

「仲間について本当に世界を取るつもり？」

エリスは、タクミの言っていることを鵜呑みにできなかった。

「ああ本当だ」

「変な勇者を呼び出しちゃったよ〜」

「お前が呼び出しておいて嘆くなよ」

タクミが拳骨を一発かます。

「いったー暴力反対だよー！」

エリスは、頭を押さえている。

「本当に魔王の娘なのかこいつ……そんなことはさておき次は敵だ。まずは一番の目標である。神族について教えろ！」

「はいはい」

エリナが諦め顔をする。

「神族は、一番トップがオーデインでその下に11人の部下がいる。その部下がワルキューレで騎士と魔法使いがいて、攻撃力防御力ともに高い。」

「ちよつとまで……それってかなり厳しくないか……」

「そうなんだよ！あと神族はみんな空を飛べるから」

「なに！空からの攻撃ありだとただけチートな種族なんだよ」

タクミは、神族と戦う場合そうとうの被害をもたらすと考える。

「でも、神族はあまり戦いに介入しない。」

「それは、本当か??」

安心したような顔になる。

「うん、人族が神族の配下になつて魔族を攻めているの」

「なるほど……それで敵の本拠地は??」

「神界」

エリナがたった一言ボソツとつぶやいた。

「神界！？深海じゃなくてか！？」
エリスに詰め寄る

「そうです」

「それなら攻めようがないじゃないか」

「うん…でも一応地上の拠点があります。」

エリスが言ってから考えもせず

「よしそこを攻略する目標に入れよう」

「本気ですか！？」

「ああまってるよ…神族！！」
片手を上にあげる

その時ゴ布林らしき奴が慌ててこちらに来た。

「大変です。魔王様！！人族の襲来です。どうすればいいでしょう
か？」

「なんですって！！」

エリスが青ざめる。そしてタクミがさっき話していることを思い出し
「おいおい、5千もいるの簡単に突破されすぎだろう」

疑問をぶつけてみる

「いや、主力は河口において来ています。今は50しかいません。」

「はあ50！！おいそのゴ布林A！敵兵力は！？」

タクミもこの状況に内心焦る。

「ワイは、ゴ布林Aじゃないジョンだ。」

「名前はどうでもいいから敵兵力は？」

「約1千！」

「どうでしょう？？タクミさん」

瞬間的に作戦が思いつく。

「それならいい作戦があるぜ」
「なんですか」

エリナが目を輝かす。

「孫子の兵法にも書いてあったが、敵が十倍以上の場合には、逃げるべしってな」

「それって……」

エリスは、わかってしまったがわかりたくない顔をする。

「おうそうだ！ここから逃げるぞ！」

「でもどこに??」

エリスは、タクミが逃げるといったのでどこに逃げるか不思議だった。

しかし、タクミはさも当然化のように

「たしか河口に主力がいるんだろ」

「そうです。でもそこまでの道が敵に包囲されていて川しかありませんよ」

「それなら川を下るしかない」

「どうやって船とありませんよ?」

エリスが考えている川を下る手段は、船しか思いつかない

「俺に任せる!!とにかく撤退だ〜」

「どうすれば……」

ゴ布林Aは困っていた。

「タクミさんに従って川まで逃げます。」

エリスは、タクミにかけてみることにした。

勇者として呼び出されたタクミを・・・

「へい!」

ゴ布林Aが走って行った。

「タクミさん川はこっちです。」

「おう！さすが頼りになるな！」

二人は、走って外に出て周りにいた魔族とともに川へと向かう。

2人+50人は、川にたどり着く。

川の広さは、そこまでで大きくないが川の流れが速かった。

「これからどうすれば??」

「よし、魔王の娘なら魔法位使えるだろう」

「はい!!」

「それならこちらへんにある木を全部切って川に流せー!!」

「できますけどどうするんですか？」

「みんなよく聞け、川に流されてる木にしがみついて流されろ！」

タクミは、大声で叫んだ。

「本気ですか!？」

エリスも、タクミに負けないぐらいの声で言った。

「本気だ！みんなは生き残りたいだろう。それなら一緒に行こう！」

この絶望的な瞬間をなくせる期待が大きかったので賛成の嵐だった。

「……おあーーーー!!」

この様子を見たエリナが

「本当にやる気なんですわかりました。風の大いなる力を鎌鼬となれ!!」

その呪文とともに周りにある木が切れて川の上の空中を待って着水した。

「さすが、魔王の娘だけあるな」

「それほどでも」

少しテレるエリス。

「全員、川に飛び込め——！！」

「おー！！！！！！」

バ
シ
ャ
ー
ン

一斉に川に飛び込んでいく。

「エリナ！俺につかまれ！！」

タクミがエリスと手を握る。

「えっ！えっ！」

「大丈夫だ死ぬときは一緒だから!!」

「そんなの嬉しくもありませーん!!」

バ
シ
ャ
ー
ー
ン

そうしてタクミとエリナは川の中へと消えて行った。

第三話 「部隊編成をなめるな〜!!基本中の基本だぞ!!」

「エリナ!俺につかまれ!!」

「えっ!えっ!」

「大丈夫だ死ぬときは一緒だから!!」

「そんなの嬉しくもありませーん!!」

そうしてタクミとエリナは川の中えと消えて行った。

「ぶくぶく……ぷはっ…タクミさん?」

エリナが必死に木にしがみついている。

ただし、魔法を使わずいぶん楽な状況を作り出している。

「タクミ…さん……どこ!？」

エリスは木にしがみつきながら、周りを見渡そうとした。

「タクミさんー!!」

「俺は……ここ……だ!」

聞こえたほうを見てみると確かにいた。

「タクミさん大丈夫ですか?」

「ああなんとかな」

タクミは、ちょうど木と木の間に挟まっていた。

「本当にですか？」

「ああ大丈夫……いややっぱだめ、エリナもう一本の木を飛ばしてくれ!!」

「ええー!!でも、誰かいたら困るじゃないですか!？」

「大丈夫だ誰もいないから!」

タクミはまったく見ずに返事をした。

「本当ですね!？」

「早くしてくれ!!!」

悲痛な叫びが水で響いた。

「もうわかりましたよ!風の理いんりにおいてそれをうちやぶる突風となれ!!」

エリナがいった瞬間片方の木が飛んで行った。

「助かったぜ」

タクミはエリナと一緒にの木へと移った。

「なんでとばされてハリマンね!!!」

なんか真上に向かって飛ばされている物体がある。

「なんか聞いたことある声だな、あああの時のゴ布林Aか!!」

「どうでしょう!？」

エリナが慌てている。

「それくらいで死んじゃあそこまでだったんだ。ありがとよ!ゴ布林A」

手を振る。

「死んでおりまへん!!」

ゴ布林Aが、別の木へとしがみ付いて言った。

「おお生きてたか!!ゴ布林A!!死んだかと思ったぞ」

「勝手に殺さんといてやー！！あとわいは、ジョンやー！！」

ゴブリンAの突っ込みを無視したタクミは、

「あとどれくらいだ??」

「そうですねあと数分でしょうか」

「よし！その時が来たら、この木を飛ばしてくれー！！」

「何ですか??」

タクミの言っていることは毎度理解できないことが多いがそれでも信じることにした。

「大丈夫！！なるべく後ろの方に思いっきり頼む！」

タクミが大声で叫んだ。

「木を離して、泳いでけーー！！」

「「「「「えーーーー！！」」」」」

全員不満そうな顔をしたが、方法がなかったため泳ぎだした。
川岸には、味方らしき魔族が縄を投げたりしている。

「エリスしっかりつかまれよー！！」

「は……はい」

「いっくぞーーー！！」

エリスとタクミは一緒に川に飛び込んだ。

「ぐふふ………」

川の流れが思ったより強く流されかける。

タクミは、こんな時に運動神経が良ければと嘆く。

「エ……リス……ぷはっ……何とかしろ………」

「……そんな……こと……い……れ……ても……無責任な！」

「…いいから……はやく……魔法……を使……え!!」

「…最初……から……つか……え……ば……よかつ……た……のに……」

タクミは、この世界で魔法を使えることをまったく頭に入れていなかった。

タクミが心の中で

「ここは、魔法を使えることを頭に入れておかない」と思った。

突然軽くなった。

「何で!?!」

隣を見てみるとエリスに周りが光っている。

それで、タクミはエリスが魔法を使ったのだと気づいた。

タクミは、川岸に行こうと必死に泳いだ。

エリスを抱えて、

「あれ……重い……」

エリスを見ると周りの光が弱まってきた。

「やばい!!」

タクミは、エリスの魔力が少なくなっていると思った。

「早くいかないと!!」

その後すぐに縄をつかんで何とか岸に上がる事が出来た。

「はぁーはぁー……大丈夫か? エリス?」

エリスの様子を見るとぐったりしていた。

「おい、起きろ!!」

バンバン

背中を思いっきり叩く。

そうすると、

「ごほっ！げほっ！いきなり叩かないで下さいよ〜！」

咳き込みながら怒っているエリスの様子をみて、ほっと一安心するタクミであった。

太陽が真上にあるから、昼ぐらいだな

「エリス様〜〜〜〜〜！！！」

大声で叫んでいるトカゲみたいなのが二足歩行で歩いていた。

「ああジョージさん！」

「大丈夫ですか？エリス様！？」

「はい何とか」

「あの…エリス。こいつ誰だ？」

「この人は、リザードのジョージさんです。昔から指揮を執ってもらっています。」

「なるほど」

「こやつは誰ですか？」

ジョージは、あやしい目でタクミを見た。

「この人は、勇者様です。」

「こんな、何も取り柄がなさそうな奴がですか！？」
訝しむ目でタクミをまだ見ている。

「何だ！？リザードD！！！」

挑戦的な態度で打って出るタクミ

「わしの名前は、ジョージだ!!」

「わかったが、俺が勇者様だ!!」

「そうです。ジョージさん。この人が本当です。」

エリスがタクミに肩入れしたので

「それなら信じましょう。」

ジョージは渋々頷いた。

「それで、生き残った人はどれくらいですか？」

エリスが聞いている部下思いな魔王様のなのだ。

「はい…31人です。」

「そうですか……」

表情が重くなる。

「それでも、包囲された状況からみると、ましです。」

「そういつてくれると助かります。」

「さすが、頭がいいだけはあるな!」

「タクミさんこれから、どうするんですか??」

「うゝんとまずは、部隊の再編だな。」

「そんなことするんですか？」

「部隊編成をなめるなゝ!!基本中の基本だぞ!!」

「確かにそうですね…それなら賛成です。」

「ジョージさんも賛成なら……」

おそろおそろ承諾するエリス。

「ああまずは、部隊再編からだ!!リザードと一緒にがんばるぞ!」

「ジョージだ!!」

そうして、無事生き残った魔王と勇者は、部隊再編を始めるのだった。

「何か最初っからみみっちいな」

第四話 「神族っておつかないな……」

「それですね。タクミ殿…言いにくいことなんですけど……」

「何だ？ ジョージ？」

「エリス様が、召喚の儀式を言っている間に、魔王軍の大半が逃亡してしまつて、今800しかいないんですよ……」

「何でそのことを早くいわない!!」

タクミの叫びが木霊した。

「えっ！ 本当ですか!？」

「はい…エリス様今残っているのは、古参の兵隊ばかりです。」

「そうなんですか……」

エリスが悲しそうな顔をする。

守って行こうと思つている矢先に集団逃亡したからだろう。

「それなら、別いいじゃないか、それに残っている奴らは、古参なんだろ!？」

「そうですね」

「新兵が、どんなにしようとも経験をつんだ奴らには、勝てないからちようどいいかもな。それで、残つた兵力は？」

タクミにとっては、過去より今のほうが対背だった。

「はい、ゴブリンが600、スケルトンが100、ウィッチが150、リザードが50です。」

「なんか…スケルトンがすごい抜けているな……。よしわかった、密に編成してくれ、戦闘部隊と特殊部隊、それに近衛部隊だ。」

「その…特殊部隊とは？」

初めて聞く言葉だろうから、簡単に説明をする。

「もつとも危険な任務をする部隊だ。だから、有能な奴を選んで、

そつから志願制にしてくれ。近衛部隊はエリスの護衛専門だからそこまで兵力をさかなくても大丈夫だ。」

「わかりました。エリス様は、それでよろしいですか？」

「はい、指揮はタクミさんに任せようと思うので…」

「それなら、ただちに編成をします。」

リザードDは、^{ジョージ}走って消えてった。

「なあエリスこの近くに町はあるか??」

「はいありますよ…でも何するんですか？」

「そりゃ、野宿はいやだから泊るところを探すんだ。」

手をぶらぶらさせて疲れていることをアピールする。

「なるほど……ってこの人たちを置いていくんですか!？」

「そりゃ、魔族がいたら。即戦闘になっちまう、その分人族に見える俺たちなら大丈夫だろう」

「そうですけど…おいていくのは……」

とてもためらいがある様子で悩んでいる。

「大丈夫だって」

「そうですか…」

「おい、そのゴブリン」

「はいな」

また、同じ顔を見て

「って、ゴブリンA生きていたのか??」

「先ほどは、ありがとうな、わいを飛ばしてくれて…」

笑いながら眉間を上げている。

「まあ…気にするな!!」

「気にするわ!!」

ジョンが近くにある角材を持った。

「二人とも落ち着いて」

取っ組み合いを始めようとしていた。

「魔王様に免じてゆるす。」

「誰がお前に許してもらわなあかん!!」

「もう!!二人ともケンカしないでください!!ジョンさん私たちは近くの町まで偵察しに行くので、今日はここに帰ってきません。」

「おお~~魔王様に名前をおぼえてもらうた!!感動や~~」
涙を流している。

「それじゃあ、とつと行こうぜエリス」

「はい」

二人は、近くの町に訪れた。

「意外に広いな」

「そうですね」

その時に橋を渡る一団がいた。

「あれは……」

一番偉そうな人が何かをしゃべっているのが聞こえた。

「くそつ、逃げられた!!せつかく魔王の娘を捕まえられるチャンスだったのに!!しかも、追撃したら木が降って来て、退却せざる負えない状況になったし……くそつたれ!!」

「なんか……怖いですね」

「あれは、俺たちを追撃した部隊だな、それに見事に俺の作戦は成功したな!」

「えっ!何のですか??」

「お前に木を、後ろに飛ばしきれて言っただろ。」

「ああ!!確かに」

エリスが納得した顔になった。

「それでの被害だな、たぶん。」

「へえゝ意外に考えてたんですね」

「意外にとはなんだ意外にとは…」

拳骨をくらわす。

「いったーい！。ほめたんですよ私！？」

「何かむかついたからな」

「理不尽な！？」

そうして、戯れているときに、突然空から誰かが来た。
甲冑で身にまとった女性だ。

「何だあれは？」

「あれは…まさか！！」

エリスがビビっている。

「おい、エリスどうしたんだ？？」

「あの人たちが神族です。早く逃げましょう。」

エリスは、俺たちを捕まえに来たかと思っているんだ。

「なるほど、あいつらが…」

神族は、背中に羽を生やしていた。

「ちよつと待て、どうやら俺たちじゃないようだぞ。」

「えっ！」

よく見ると、人族の隊長に向かっていた。

そしてその隊長が慌てて、

「何でございましょうか？フレイヤ様」

「エリス、フレイヤって誰だ!？」

「フレイヤは、神族の一番槍と言われている人です。」

「なるほど、強いのか……」

「なんじは、人身売買や売春行為で多額のお金を稼いでいたとは本当の事か??」

フレイヤが、人族の隊長に問いかけている。

そうすると、隊長は、青ざめた。

「い、いえ……何のことをおっしゃっているんですか?」

「そなたが、不正な行為で金を稼いでいるのか。と聞いている。」

「そんな事する筈が無いじゃないですか!？」

フレイヤが剣を構えた。

隊長が後ろに下がって行っただ、橋の手すりにぶつかった。

「オーデイン様より、そなたが嘘をつかなければ軽い罰でよいが、嘘をついた場合殺せと言われている。」

「ひっ!…ひっ!何で……!?!」

「お前に最後のチャンスを与えたのだが、残念だ。」

「っ!?!」

次の瞬間。

隊長の頭が吹っ飛んで、体は川へと落ちて行った。

「肅正完了。そなたたち行ってもよいぞ」

後ろに待って行った兵たちは、みな走ってこの場から去って行った。

「エリス…神族はあんな感じなのか!？」

「はい、そうです。人族、魔族関係なしに、肅正してってます。」

「神族っておつかないな……」

タクミ自身、その光景を見ているときにつばを飲み込んでいるのに気付いていない。

フレイヤがこちらを見た。

俺は、一步も動けずに固まってしまった。

そして、視線を上に向けて飛んで行った。

「俺たちを見逃したのかな？」

「はい……たぶん……」

「こんなところにはいないで、さっさと行こうぜ」

「そうですね」

二人は真っ赤な夕日が見える中、宿屋を探しに街の中へ駆け足で入って行った。

第五話 「……勇者が魔剣を持つか！？普通！！」

ここは、ヴァルハラ宮殿。

神族の唯一の地上拠点。

そこには、大きな翼をもった女性と、甲冑で身にまとった女性がいた。

「オーデイン様ただいま帰還しました。」

甲冑で身にまとった女性がひざまずき、そう言った。

「よくやりましたね。フレイヤ」

大きな翼をもった女性が返事をした。

「は、はい。もったいなきお言葉……一つ報告しなければならなかったがあります。先ほど訪れた町で魔法の娘ともう一人不思議な男がいました。命令になかったために放置しました。」

「魔王の娘ともう一人の男は、別の世界の勇者です。」
下に向いていた顔をあげて

「勇者！？すぐに殺した方がいいのでは？」

「大丈夫です。すでに対策を講じてあります。もうすぐ現れるでしょう」

一人の少女が歩いてきた。

「まったく、バカ兄貴がいなくなったと思えば、なんでか私までこんな変なところにいるのよ」

「来ましたか、ようこそヴァルハラ宮殿へ」

初対面の人にケンカ腰に

「あんだ誰？」

「私の名前は、オーディン。改めて歓迎します。両羽りょうは 千夏さんちなつ。
そして、両羽 巧の妹さん」

そんなことを気にしていないかの様子で言った。

「何で私の名前と家うちのバカ兄貴の名前を！？」

突然兄の名前が出てきた少女は驚いた。

ヴァルハラ宮殿でどうなっているのか知らない二人は、宿屋を見つけて泊ることにした。

宿屋の中は、ぼろくてランプが一つしかない暗い場所。

「今の状況じゃまずいな……」

「だから、行ってるじゃないですか！無理だつて！」

「まあ、それはおいおい考えenとして、魔法軍の歴史について教えてくれ。」

「急にどうしたんですか」

「いや、何で負けたのかと思って。」

「それは……」

物思いにふけりながら語り始める。

私は昔を思い出す。

私たち魔王軍はお父様の魔剣と采配をもって連戦連勝をしていきました。

このまま人族に勝つかと思われたのですが、そこで現れたのが神族です。

戦っていると突然空が光り翼を持った人達が下りてきました。

そして、私たちの軍のみを攻撃してきたのです。

その時は、何とか逃げ偽る事が出来ました。

そして、たびたび来る神族を撃退はしていましたが、被害が多く。

お父様は、神族、人族と和平を結ぶことにしたのです。

そして神族はそれを承諾して、この戦争は終わりを迎えたように思えたのです。

その和平調印の場で、神族の主のオーディンがお父様を剣で後ろから刺したのです。

その後、すぐ戦闘になりお父様は何とか生きている状況でした。

そんな時私に、

「後の事は、お前に任せる。この魔族を栄えさせるのも滅ばすのもお前の好きにしてい」

と言ってくれました。

そして重臣たちに言葉を残してから息をなくなり死にました。

その後魔王軍は、連敗の連敗を重ねて自然に崩壊しました。

生き残った少数の兵と共に私たちは逃げて、最後の希望を勇者召喚にかけたのです。

「そこから、タクミさんと出会って今といたるわけです。」

「なるほどなーこの話を聞くと神族が悪いみたいだな。」

タクミの言葉に反応してエリスが興奮気味に

「そうです！私のお父様を殺して……」

「わかったから落ち着けて」

エリスは、はつとなる。

「すい…すいません。タクミさん」

「事情はわかったから。」

「それで……次に行きたいところが出来ました。」

エリスは突然、決意をした目になる。

「行きたいところ？」

「今の話で思い出したのですが、ここから西にある森に、お父様の使っていた。魔剣があるんです。それを取りに行こうかと思っています。」

「

「魔剣!？」

「そうです。それをタクミさんが使えばこの状況を覆せれると思うんです。」

「俺が魔剣!？」

「勇者なので魔法などの素質があると思います。」

エリスの一つ一つの言葉には、迫力があつた。

「……勇者が魔剣を持つか!? 普通!！」

「でも、これしかないんです。お願いします。タクミさん!！」
「わかったから」

俺は相変わらず、女の子のお願いには弱いらしい。

だって男だもんしかたない。しかたないよね！！うん。

「よし、明日には出発したいから今日はもう寝ようぜ」

「はい」

そうして夜が明けた。

「それじゃあ、全軍に伝えてくれ目指すは魔剣が眠る場所だ！！」
魔王軍一同、魔剣が眠る場所へと移動を開始したのであった。

「本当に勇者が魔剣を持ってるのか！？」

第六話 「お前にみんなが付いて来てるだろ!？」

魔王軍総勢800人は、一路魔剣が眠る森へと進路を取っていた。

エリスとタクミは、徒歩で移動している。

「なあ、エリスゝ馬はないのか？馬はゝ？」

まだ歩き始めて2、3時間しかたっていないのだがタクミは、すでに疲れた様子を見せ始めた。

「まだ、歩き始めたばかりじゃないですか!？」

エリスは、疲れなど一つも見せずに歩いている。

「ちかれたゝゝ」

「まったく、それでも男なんですか」

余裕満々な顔をして言う。

「そんなゝ俺は、元いた世界では、アウトドアのひきこもりで町では通っていたんだから!」

「アウトドアで引きこもりっておかしくないですか!？」

エリスがもつとらしいことを言った。

感慨深い顔をして

「外に出るのは好きなんだが、趣味がなくて引きこもってばかりだったからな」

「引きこもって何してたんですか？」

「本ばかり読んでたかな」

ちよつとびっくりして

「本ですか!？今のタクミさんには一番似合わないですね!」

言ってから、エリスは殴られるかと思つて頭をガードしたが殴つてこなかった。

「そうかもな…」

予想外の言葉にエリスは驚いた。

「確かに俺は変わったのかもな…ここに来て」

タクミは、今まで親父たちに囲まれていたせいか普通じゃ考えられない体験を何度もしてきた。

その中で本を読む行為は、心が静まったために好んで本を読みふけていた。

そんな生活を送っていたタクミからしてみれば今みたいな生活もありなのかなと思う心があるのかもしれない。

「タクミさん……」

エリスは気まずそうな顔を作る。

「ふにゃー！にやにすりゅんですっか！タクミしゃん！！」

急にほつぺたをつかまれて慌てるエリスに

「何暗い顔になってるんだよ！お前は笑ってるかアホなことしてればいいんだよ」

「アホなことってなんですか！アホなことって！」

先ほどの雰囲気とはうって変わって賑やかな感じになった。

「もう…タクミさんは」

エリスは微笑んだ。

「何だよ。」

ちよつと照れたタクミであった。

その後小休憩を取りつつ進軍していき、あと四分の一まで差し掛かったところで空がオレンジ色に染まり、太陽が沈みかけたために野営することになった。

「食料とかは、大丈夫なんだろう？」

「はい、あと2、3週間分はあります。」

「しかし、なんでそんなに準備がいいんだ？」

タクミは、敗走してきた魔王軍にしては、武器や食料が多くある。

「それはですね…魔王上に会った秘宝やお宝をすべて売ったからです。」

苦笑いをする。

「それは、凄いな！お前もなかなかやるな」

タクミがエリスの事をほめている。

「…そんなことないですよ……ただみんなの事を考えてですね…そうしたほうがいいかな…なんて思っただけなんですから」
もじもじしながら返答をした。

「何照れてるんだ？俺はそこまでしてお金が欲しかったのに驚いているだけだぞ」

タクミは、ほめたことが照れ臭かったのでごまかした。

「そんなひどいです。お金なんていりませんよ！」

「じゃあ、俺にくれよ」

ポケットから巾着みたいなものを出してきて

「今これだけしか…」

チャリン出てきたのは、銀貨3枚だった。

「まじか？」

「はい…」

タクミが銀貨3枚をこれでもかっていうぐらい眺めた。

「本当にこれだけか？」

もう一回確認する意味も込めて聞いてみる。

「はい…そうです。」

「これからどうするんだ？」

「どうしよう…」

「質問を質問で返すな!!」

タクミは内心呆れはしたが、エリスはぬけているところがあるなと思った。

「これからいつて魔剣を取ってから考えましょうよ…ね!」

ごまかすように早口で最後の『ね』をやけに強調させた。

「はあ、お前も人のことが言えないくらいいい加減だな」

「そんなことないですよ」

やけになったように反論してくる。

「いやいや、そんなことあるだろう。自覚してないだけだろ」

「そんなことないです。」

二人がいがみ合っているところに

「ご飯出来ましたよ……」

おそろおそろ、骨人間が話しかけてくる。

「うん？誰だこいつ？」

「私は、スケルトンの骨子といいます。」

「そのまんまだな」

見た目通りの名前だ。

「わかりました。すぐ行きますね」

骨子は、どこかに行ってしまった。

「エリス、さっきの事は水に流そうか」
「そうですね。流しちゃいましょう」
「ようやく二人の意見が一致した。」

食事中

「こういう感じもいいな」
周りでは騒いでいてとても楽しい感じになっている。
「そうですね。私もそう思います。」
エリナも周りを見ながらつぶやく。
「私は、こんなみんなの笑顔が見たくて戦っているのかな〜って思う時もあります。」

「そうか……軍を率いる者の心構えとしては十分だな」
タクミは、にやっと笑う。
「何で笑うんですか？」
「これから、勝てる気がしたからだ。」

「勝てる気が？」
エリナが首をかしげる。

「お前にみんなが付いて来てるだろ！？」
「でも……私なんて軍を率いる資格なんてないですよ……」
落ち込み気味な発言をしたエリナに向かってタクミは、

「エリナが軍を引っ張っていけ、そして俺がお前の頭となって引っ張ってやるから心配するな。」

タクミがやさしい笑みを見せながらエリナに言ったため。

エリナは、呆然としつつ頬が少し赤くなる

「何ですか？急にそんなこと言いだして」

「エリナにこれだけは言いたかったからな」

「そうですか」

そうして、月の下で二人は、仲をより仲良くなり、魔王軍は踊って舞った。

朝日が見えるころに……

「大変だ〜大変だ〜人族の部隊が来た〜」

偵察に出ていたゴブリンが慌てて伝達してきた。

「ふわぁ〜〜〜寝み〜」

あくびを殺しながら髪をぼさぼさとかいている。

「そんなこと言わずに、どうするんですか？」

自信満々な顔で

「昨日行っただろう、俺がエリナの頭になって引っ張ってやるって」

「そうですけど……」

タクミは立ち上がり

「よし、人族を迎え撃つぞ!!」

魔族と人族の戦いが始まろうとしている。

第七話 「全軍停止！！このまま陣形を整えろ！」

タクミ達は、敵の兵力を探るため最初に偵察を出した。

そして1、2時間したら偵察に出したゴブリンが返ってくる。

「兵力はどれくらいだ？」

「1000後半ぐらいです」

あいまだが、見ただけで数を数えるのは難しいから仕方ない。

「倍ですか……」

エリスは、タクミの方を見る。

「倍だな！よし、今から作戦を言うぞ」

タクミは、兵力など関係ないかのような雰囲気を出している。

「大丈夫なんですか？数も不利ですし、地形も左右が山に囲まれていて、一本道みたいなどころなんですから」

不安の要素がたくさんあったためエリスは、大丈夫なのか心配している。

「ああまかせとけ！」

タクミは、魔剣の事しか考えていなかった。眼中になかったのだ。

敵の事など……

場所が変わって、人族の軍隊。

「申し上げます。敵は、前方に陣を張っており、横長い陣を引いております。数は、不明です。」

若い偵察兵が指揮官の所まで来る。

「なんだと！どうしてもっと、詳しく調べなかった。それでは、兵力もわからんではないか！」

戦いはじているというのに、右手にビールのジョッキをもち、イスに深くもたれかかっている人物がこの部隊の指揮官が言った。

「くそっ！これでは、作戦がたてれんではないか！」

机にジョッキを思いつきり置いた。

その音に驚いた若者は、そそくさと出て行った。

そして、横に控えていたいかにもエリートの上官学校を出ましたみたいなのが指揮官の前にきた。

実際そうなのだが。

「魔族におそるに足りません。ここは兵力で押していきましょう。」

「まあ、そうなんだが」

指揮官は、経験上では危ないと思うのだがこの参謀は有能なことから士官学校から派遣されてきたためある程度は言うことを聞かなければならない。

「ふむ、お前に任せてみよう」

「ははっ、ありがとうございます。それでは、横一列に並んでいるので三つに部隊を分けてそれぞれでぶつけていきたいと思います。」

指揮官の目が少し大きくなる。

「部隊を三つかに分けるのか……まあいいだろう。編成もお前に任せる」

「わかりました。お任せください。」

そうして、若い参謀は出て行った。

「グスバルね……あいつは使えるのだろうか？」

グスバルと呼ばれる若い士官は、着々と準備を開始した。

そして、昼過ぎのころグスバルは、部隊を三つに分けてそれぞれ、歩兵同士の戦闘が起きるかと思っただが、敵は逃げて行った。

「ふんっ、やはり魔族なんてただのクズだな！」

そして、顔のおでこあたりに手を置き笑っている。しかし彼自身きづいていなかった。

これがすべて読まれていることを……

山の中に、大勢の兵力と二人の人物が潜んでいた。

「やっぱり、こう来たか」

タクミは、笑っているまるで獣を追いこんでいるような感じで

「タクミさんどうして、三つぐらいに部隊を分けるなんてわかったんですか？」

ちよっと疑問を持ったのか小声で聞いている。

「それは、横一列に並んでいるときに一番気を付けないといけないのが、横からの挟撃だ。そしてそれを効果的に防ぐために、分散させてのだろっがあの部隊の指揮官が参謀の腕はそこで終わりだ。本質を分かっている。」

「本質ですか？」

頭の上にはなマークが浮かんでいる。「ああ、部隊を分けるって事は兵力を分割して数が少なくなっている。だから隠れている部隊でも十分に対応が出来る。こういう時に便利だよなスケルトンって」

タクミは、スケルトンがただのゴミだという考え方を改めた。

ただしエリスからするといくら死なないからと言っても捨て駒みたいに扱うことを少しためらっている。

「まだ…なんですか？」

スケルトンの人たちをかわいそうに思ったエリスは急^せかすようにタクミに話しかける。

「もうちょっとだ……」

そして、山の中でひっそりと息を静めていることを知らないグスバルは、勝てるかと確信したために慢心している。

「そのまま押し切って！……！！」

そのまま勝てるかのように思えた戦場。

しかし、グスバルの見た光景は、悪夢だった。

三つの部隊のうち、左右の部隊が魔族によって攻撃されていたのだ。

「魔族にあれだけの兵力があつたのか！？」

確かに目の前の光景は信じられないことが多いだろう。

「申し上げます。」

傷だらけの兵がこちらに方向を持ってきた。

「中央の部隊からですが、敵主力だと思われていた部隊は、少数しかいません！！」

その兵士が悲痛な叫びが戦場に流れる。

「そうか……」

グスバルは、敵の戦術に見事にはまったことに気付く。そして、愕然とする。

少し時は戻って

「あと少しだ。落ち着け」

タクミはエリスの肩に手を置きながら言う。

「落ち着いてます。」

先ほどの雰囲気とは変わっていた。

そして、敵部隊が真横に来たところで

「全軍！突撃！！」

「おー！！！」

雄叫びが鳴り響き魔王軍は、敵部隊に向かって攻撃を開始した。

そしたら、その勢いにのまれて押されて中央に人族の軍が集まり、だんだんと包囲される形が出来てきた。

三方を囲んで、後ろだけ開けている三日月型の陣形が完成した。

「なんで、後ろを開けておくんですか？」

エリス達は、全体がある程度見える丘に来ていた。

「それは、囲むと敵が追い詰められたと自覚して最後の奮戦をしてこちらの被害が多くなっちまう。でも、一か所だけ開けておくところに逃げれると思ってどんどん逃げてくれるから、その後ろから攻撃したほうがこちらの被害が減るからこの陣形なんだ。」

「なるほど」

エリスは、納得した顔を見せた時にタクミの言った通りに敵は逃げ始めてこちらが追う形となった。

敵を散々追い回して途中で

「全軍停止！！このまま陣形を整えろ！」

タクミの言葉で敵を追うのをやめ始める。

「こんなもんでいいだろう。」

タクミは、魔王軍の強さを確認できた意味でも今回の戦いは有意義だった。

「そうですね！」

エリスは、タクミの作戦がしっかりとあることを知って内心驚いている。

いつもボケツとして何にもできそうにないようにしているのに今のタクミは、単純にいくつも作戦を考えてしっかりと実行しているところがすごいと思った。

「このまま、一気に進もう。魔剣の眠る森まで！」

タクミの言葉で全軍は動き始めた。

第八話 「おいおい、言わんこっちゃない……」

グスバルは、逃げて行っている部隊を見て何も言えなかった。

「グスバル…お前の慢心が招いた敗北だな
いつの間にか指揮官の男が来ていた。

「すいません。ゴルバ殿」
頭を下げて誤っているがその顔はくやしさを唇をかんでいる。

ゴルバというのは、今回の指揮官の名前で勇猛果敢だが上官の命令意を聞かないため部隊長どまりの男である。

「次は、俺が指揮をする」

「次？」

今回の戦いは惨敗で終わったにも関わらずゴルバは次の機会を狙っていた。

「次ですか……」

「ああ、もうすぐで増援の部隊が1000人、来ることになっている。それと今の部隊を合わせて再度叩くぞ!!」

ゴルバは自信満々で魔王軍の事を狙いつつ退却するのであった。

一方魔王軍は、そのまま魔剣の眠る森へと進んでいた。

「魔剣ってどんなものなんだ？」

二人が並んで歩いているときにタクミが聞く。

「お父様が持ったものです。名前はダーインスレイブと言います。」

「ダーインスレイブ……」

名前からして魔剣っぽくタクミ自身持てるのか自信がなくなっている。

「これは、お父様から聞いただけなんですけど、なんでも戦場を一瞬で減る事が出来るらしいです。実際お父様の攻撃で戦場が変わるのを何回も見てきましたから」

「戦場が一瞬で……」

タクミは、その魔剣を手に入れば魔王軍をかなりいい所まで立て直せると確信した。

「それじゃあ、速く取りにいかないとな」

「もう、待つてくさいよ」タクミさん！

タクミの歩幅が大きくなり駆け足気味で歩いていくのにエリスは後ろからついて行く。

夕方あたりに差し掛かり野営することになった。

本当なら今日中に着く予定だったが戦闘をしたために一回休息を取る必要があったのだ。

「あと、少しだな」

タクミは、もう少しで魔剣の所に行けるといって高揚感に浸^{ひた}っていた。

「もう、子供見たいですよ。タクミさん」

エリスは、そんなタクミが面白くて笑う。

「タクミさん、少し頭を冷やしに行ってきた方がいいですよ」

「…そうかもな」

タクミ自身とても興奮していることに気付いたので

すこし、雑木林の中へ行く。

「しかし、本当にありえないことだらけだよな…魔剣とか魔法とかRPGだけかと思ってたのにな」

そんな風に感慨にふけていると

「助けてくださーい！！！！！！」

急に女の人のかわいらしい叫びが聞こえた。

「うん…これ、前に聞いたことあるような……」

少し考えてみてもわからなかったためいつて見ることに、そして、腰にかかっている剣の鞘の部分を持ちながら声のする方へ向かっていった。

「助けてくださいー」

月明かりが木によって防がれており少薄暗い林の中にその人物がいた。

「お前は、骨子か！」

前にご飯の時に呼びかけてくれたスケルトンの骨子がいた。

「…で…何で頭だけなんだ。」

骨子は、頭蓋骨の頭だけこちらを見ていた。

「私―転んで体がバラバラになっちゃったんです。」

「バラバラ……」

周りを見てみると、確かに骨らしきものが散らばっている。

「タクミさん、直してください!!」

頭蓋骨の口の部分だけが動いている。

「これを、直すのか……」

周りには、三ヶタ行くのではないかと思えるぐらいの骨が散らばっている。

「お願いしますよ……」

「いや…俺には無理だ。ありがとうな骨子。ご飯のときに読んでくれて」

タクミが後ろを向いて帰ろうとして

「ちょっと待ってくださいタクミさんひどすぎます。」

骨子の叫んでいる。

「私なんて戦場でも体に触れるだけでバラバラになってその後には体中を踏まれるだけな存在ですけど助けてくださいよ……」

「それは何ていうか…残念だな」

タクミは、振り返って言う。

「残念でもいいですから助けてくださいよ……」

骨子の口がカチカチ言っている。

「ああ、わかったよ!」

そうして、タクミは、骨子の修理を開始した。

「えーと、ここは、これでいいのか?」

「違いますよ〜なんで手と足が同じところにくっついてるんですか〜」

「ああー面倒くさい!〜!」

その後ちよつとづつ直していき

「ふうー終わった。」

ようやく骨子の体に戻ったのだ。

「いったい何時間かかったんだよ……」

頭のあたりの汗を手で拭い取る

「タクミさん、ありがとうございます。それではこれで」

骨子は走って去っていく。

「おい、骨子走っていくと…」

「キャ!」

骨が散らばる音がした。

「おいおい、言わんこっちゃない……」

目の前には、骨子の骨が散らばっている。

「タクミさー……ん……!」

「わかったよ直してやるよ」

その後さつきと同じ通りに直していき

「さすがに一回やったことがあるだけに早く終わったぜー」

タクミは、このことを自分で言っただけで切なくなった。

「ありがとうございます」

骨子がお礼を言う。

「ああ、ゆっくり帰れよ」

そのまま、骨子とは別行動をとった。

「大丈夫かなあいつ……」

タクミは、骨子のことを少しでも心配した。
でも、

「スケルトンの組み立てに慣れても得ないな……」
ちよつと損したようなくわらない気持ちになった。

戻っていくと

「タクミさん!!どこ行ってたんですか!？」

エリスは、心配そうな顔をした。

「ああちよつとな……」

エリスに心配させてことに申し訳なさを感じるが骨子の事はあまり話したくなかった。

なんせこつちに来て一番疲れたことだからだ。

「そうですか……」

エリスは、小さくうなづいた。

夜が更けて行く。

第九話 「…っってお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのは!？」

ヴアルハラ宮殿では、一日休んだ千夏がオーデインに会いに来ていた。

「おはよう。千夏さん。」

オーデインは、前回会った時とほとんど同じ位置にいた。

「それで、決めてくれましたか？」

まっすぐとした視線で聞いてきたため、

千夏は

「はい、決めました。私は、バカ兄貴を連れ戻す！」
こぶしを握りしめた。

「わかりました。しかとその覚悟を受け取りました。それでは貴方には、人族の部隊を率いて魔王軍と戦ってください。」

「私が指揮をとるんですか？」

千夏はいままで一度も指揮なんてとったことがなかったので心配だった。

「大丈夫ですよ。あなたにならできます」

「っ！」

千夏は、震えた。内心をオーデインに悟られたからだ。

そして、体の中にとても冷たい何かが残った。

「あなたに渡したいものがあります。」

そうして、オーデインが後ろから持ち上げたのは、長さが2メートルぐらいあるでかい大剣だった。

千夏は、オーデインがもともと渡すために後ろにおいてあったので私の心を読まれたとかそんなことを考えたが、目の前の大剣に心を

奪われた。

「……………」

何も言えないほど何かすごいものを感じ取った。

「これは、聖剣エクスカリバーです。」

「……エクスカリバー……」

「太古より、邪なるものを倒してきた聖剣です。あなたにはこれを使って魔王を倒し兄を取り戻してください。さあ、こちらに……」

そして、千夏はオーディンからエクスカリバーを受け取る。

「軽い……」

持ってみて重いと予想したのだが以外にも軽かった。

「それは、あなたに聖剣がなじんでいるからです。」

「なじむ？」

首をかしげる

「エクスカリバーがあなたを認めたのです。使うごとにどんどん強く使いやすくなるでしょう」

「そうですか……」

「それでは、あなたはブリュンヒルドを付けてあげます。」

そうして現れたのが金髪のショートヘアの女性だった。

「オーディン様。何なりとお申し付けを」

ブリュンヒルドはひざまずいている。

千夏はその様子を立ったまま眺めている。

「そなたには、そこにいる千夏さんを助けてもらいたいです。」

ブリュンヒルドは、ひざまずいたまま千夏の方を見た。

「かしこまりました。」

「それでは、千夏さん、ブリュンヒルドよろしく頼みますよ」
オーデインはその言葉を残すとそのまま何も言わなくなった。

そして、二人は出て行った。

妹に狙われていると知らないタクミは、魔剣の眠る森に着いた。

「はぁーやつと着いた！……ってここで会ってるのか！？」
タクミの目の前に広がっているのは、昼にもかかわらず薄暗い森だった。

「はいそうです。」

エリスこくこくと首をふる。

「まじかよ……もっとお城とかとてもでかいお墓にありますとかそういう設定はないのかよ！！」

「タクミさんは、いったい何に期待してるんですか？そんなのすぐに見つかって取られちゃうじゃないですか！」

「ああそうかよ」

タクミは項^{うなだ}垂れる。

「もうそろそろ来ると思います。」

エリスは、誰かを待っているかのようなそぶりを見せる。

「誰がだ？」

「ここを守っている部隊です。」

「ここに部隊がいるのか兵力はどれくらいだ？」

タクミにとって兵力を増えるのは願ってもないチャンスだった。

「確か…1000人ぐらいいたような」

エリスは指を顎に添えて考えて言った。

「1000人つてどこいるんだ？」

見た感じ薄気味悪いただの森しかなかったので不思議に思っていると

「エリス様おひしゃしゅうございます。」

そうして現れたのが魔法使いみたいな服を着ていかにも怪しい宝石をついた杖を持っているよぼよぼのおじさんが出てきた。

「ジェンじい！久しぶりです。」

そうして、エリスとジェンじいは、はぐをする。

「だれだ？こいつ？」

タクミが不思議そうな顔をする。

「この人は、リッチのジェンじいです。お父様に古くからつかえていて。私の魔法の先生です。」

「リッチっていうのは？」

リッチというのがわからなかったタクミは聞いた。

「魔族の中で一番魔法が使える人たちのことを言います」

「なるほど」

紹介されてジェンじいがタクミの前に来る。

「ふおおおおーエリス様は、召喚の儀式に成功したのですね」

「はい。」

「…ってお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのは！？」

ジェンじいを指でさしてタクミは驚く。

「そうです。ジェンじいが起死回生の魔法として召喚の魔法を教えてくださいました。」

エリスがそういうと

「お前のおかげでこっちは巻き込まれたんだぞ!!」

タクミは、叫んだのだがジェンじいは、無視する。

「わしの魔法間違えたかの」

手を顎においてさすりながら言った。

「何だとこのじじい！俺を読んでおきながら!!」

タクミは、食って掛かる。

「二人とも落ち着いて、タクミさんの指揮のおかげで二回も救われています。」

「それならよいのじゃ、それでエリス様要件は、魔剣を手に入れることでいいのですか？」

さも、先の話はどうでもいいかのようにエリスと話す。

「はい。」

エリスははつきりと頷く。

「この男に適性があるのか楽しみじゃのう」

不気味

な笑いを浮かべている。

「それじゃあ、行きましょうタクミさん」

エリスがタクミの袖を引っ張る。

「ああ……」

タクミは、ジェンじいの言っていることに疑問を持ちながらエリス共に深い森の中に入って行った。

そして、小さな穴があった。

「ここです。」

エリスが指をさしている

「ここか……」

中の様子は良く分からないが不気味なオーラを感じる。

「それでは、タクミさんこれを持って行ってください」

そうしてエリスは、タクミに灯のともったろうそくを一本を渡す。

「これから俺一人か??」

「そうです。頑張ってください」

そうしてタクミは、穴の中に入っていく。

「けっこうな。広さがあるな」

周りを見渡すと人が二人ぐらい余裕でおれる道があった。

「あそこか……」

急にひらけた場所に出て目の前に周りに術式みたいなものが書かれているところで剣が浮いていた。

「これが、ダインスレイブ……俺の物にしてやるよ!」

タクミは、手を触れた。

そうすると突然闇に包まれた。

「なんだ?」

「お前は、誰だ?」

声が聞こえたうす気味悪い声が……

「私は魔王だ。」

いきなり魔王に会ったのだった。

第九話 「……ってお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのは!？」 (後書き)

感想や評価などを待っています。

第十話 「まさか……魔王!？」

「私は魔王だ。」

「えっ!!」

声は聞こえるのだが姿がなかったため内心で焦っていたがなるべく顔に出さないように心掛けた。

「それでお前が魔王か……」

手に汗をかきながら聞いた。

「いかにも、私が魔王だ。」

やはりどこから話しているのかわからない。

「それなら要件が早く済みそうだ。とつとと魔剣をだせ!」

「まあ、そう焦るな少し話しよう」

なんか急になれなれしくなった。

「何のだ？」

「エリスは、元気にしてるか……?？」

弱弱しい声で言われたためタクミは、少し引く。

「…ああ、元気だぞ。魔王軍をしっかりと引つ張って行っている。」

「そうかそうか、さすがは私の娘だな!」

なんか声が明るくなっている魔王を見てタクミは確信した。

「お前、親バカだろ……」

魔王がちよつと焦った声で

「何バ力なことを言っているんだ。ただ……娘を可愛いと思って当然だろ！！なあ！お前もそう思うだろ！！」

「まあ、確かにかわいいな……」

「可愛い……だと……」

少し変な間が流れた。

「お前！私の娘に何かしたな！！あまりにも可愛いからってやってもいいことと悪いことがあるぞ！！今すぐにお前を消してやる」

「えっ！！ちよつと、エリスのお父さん……いきなり消すってないんじゃないですか……」

いきなり怒られたタクミは、焦りつつ逃げる場所がないためどうしようもできなかった。

「お、お前なんかにお父さんと呼ばれたくないわ！！汚らわしい！」

「こつちだつて、お前がエリスを生んだことが不思議だよ！」

タクミは何かむかついたために反抗している。

タクミ自身消されると言われて黙ってはられないのだろう。

「何！わしを愚弄するどころか娘の悪口を言うのかお前は！！」

どこにでもいる親バ力なお父さんみたいだった。

魔王の威厳も何もそこにはなかった。

「エリスがああの性格なのも頷けるな……こんな父親を持ったらな……」
タクミはため息を一つ。

「ちよつと甘やかしすぎただけだ……」

ちょっと言い訳じみた感じに魔王がつぶやく。

「ちょっとじゃないだろ絶対に！教育の仕方が根本から間違っているぞー！！」

タクミはなんか…立場逆転してないかなと心の中で思った。

「わしだって、心配で心配でこうしてエリスが魔剣を取りに来るのを待っていてサプライズにしようかと思っておったのにお前なんかむさくるしい男が来るとは思わなかったわい。」

「サプライズって…死んでないのか？？」

そうすると紫色の塊が出てくる。

「体は滅びても魂はちゃんとあるからな」

タクミは触れようとしたが触る事が出来ず通り過ぎて行った。

「なるほど……で、お前はこの状況をどうにかしようとしなのかな…」

タクミは、今までとは違う真面目な顔をしていったため、魔王はそれに答えた。

「わしは、死んだのだ。今は魂でしかない。だから、すべてをエリスに任せた。」

「エリスが大変な目にあっているのを知っててか！！」
ちよつと興奮気味で言ったため語気が強くなる。

「ああ、わしは全てをエリスに託したのだ。逆に信頼におけるだけの器になったと思ったからだ」

タクミは、確かに今のエリスは軍を率いていけるだけの器はある。

「エリスは、苦しくても頑張ってたんだぞ！それを見ているだけか

「俺はエリスを助ける。だからとつと魔剣をよこせ!!」

タクミは、叫んだ魔王に向かってだけではなく誰かに向かって叫んだ……

「わかった。お前の覚悟は、しかと聞いた。それではお前に素質があるか確かめる必要がある。」

魔王の魂らしい後ろに一本の剣が出てくる。

大きさは、1メートル50センチぐらいだろうか、細いスリムな剣が出てきた。

「ただし、素質がなかったらお前の命を食べてしまう剣だ。この剣に認められたものだけが扱える事が出来る。お前にそのことを分かっているか？」

「そんな事、百も承知だ。俺は、エリスを助けるためにこの剣を取ってやる。」

タクミは、ここに来る前はただ本を読んだりして何も面白くない時間を過ごしていた。

それこそ太陽のように時間通り上がって時間通りに沈んでいくそんな生活を送っていた。

でも、エリスがこっちの世界に呼んでから一変した。

まだ数日しかたっていないがそれでもいろいろなことが楽しめたことが何よりうれしかった。

楽しかった。

だからもとエリスと一緒に何かをしていこうと思った。
これからもっと大きい事が出来ると思ったから・・・

「覚悟してやるよ」

そうして、魔剣を手にとると、周りに黒い何かが渦巻いた。

しかし、怖いなんて思わなかった何でか少し暖かく感じた。

「これは……死ぬのかな……」

そう感じたのだが渦は収まっていき自分の手には剣がしつかりとあった。

「ほぉーっグーインスレイブが認めたかお前を……」

「手に入れたのか俺がこの魔剣を……」

剣を持つてみると意外に軽く竹刀を持った時と同じ重さだった。

「お前は面白いな！これから楽しみだ」

景気よく笑っている魔王。

「何でだ??」

「お前は、魔剣に認められたのだからな
言っている意味が良く分からなかった。

「これは、楽しみになった！」

ケラケラと笑う魔王だった。

「そんじゃあ、俺は戻る。じゃあな」

「どうやってだ？」

確かに周りは暗闇に包まれている。

「そんなのこうやるんだ！」

ダインスレイブを一振りしたら周りがパリンという音と共に先ほどいた洞窟へと戻ってきた。

タクミは、洞窟から出ると

「タクミさん!!」

倒木の上に座っていたエリスがこちらに走ってきた。

「大丈夫でしたか!？」

心配そうにして来たのでタクミはダインスレイブを見せる。

「ほらな!!」

「それは、ダインスレイブ……タクミさん手に入れたんですね!!」

「ああ!!」

二人して、抱き合って喜んでいたのだが、

「ワァン!!ガウウウー!!」

何やらイヌかオオカミの声が聞こえてきた。

後ろを見ると、

（わしのエリスに何するんだ）

タクミの頭の中に言葉が響いた。

「まさか……魔王!？」

タクミと一緒に元魔王の体長約1メートル後半のでかいオオカミが出てきたのだ。

番外編 「寒いハロウィーンを過ごしたのさ」(前書き)

番外編です。

本編とは、少ししか関係ありません。

番外編 「寒いハロウィーンを過ごしたのさ」

クミは、13歳の時の夢を見ていた。

「兄さん！今日は、ハロウィーンだね！！」
まだ、小学6年生の千夏がこっちにくる。

両羽家では、大抵両親が不在なため俺がほとんど家事をしていた。

「ああ、そうだな。だから、今日はカボチャメインの食事にしてやる。」

その日がたまたま休日だったために俺は、一日中かけて仕込みをしようとして計画を練っていたのだ。

「楽しみだな〜」

「おお任せておけ」

俺は、そうして仕込みをするために材料を切ることにした。

「兄さん。今……朝だよ……お腹すいたよ〜」

「ああ……忘れてた」

「兄さん時々そъいうの抜けているからダメなんだよ！」

「ごめんごめん」

俺自身、何となく楽しみにしていた。

親父たちがケチなために、こういう日しか、豪華な料理を作れなかったのだ。
時々思う。

中学一年生が考える事じゃないよな……

「兄さん、まだー！ー！」

「ああ、ごめん。ごめん」

すぐに朝ごはんを作った。

「いただきます」

二人の声が家の中から聞こえる。

「どうだ！？」

今日は、ベーコンエッグを作ってみた。

「うん。いつも通り！」

「そうか……」

作った俺からしてみるといつも通りというのが褒めているのかよくわからない。

「でも、お父さん達何してるんだろっ……」

「さあ??今はどこにいるんだっけ?」

二人とも何でか知らないけど忙しい。

母さんは、映画の収録で忙しいのだろうが、親父が忙しいのは分からない。

ただ単に、一緒にいたいだけなのかもな……

「今は、確かヨーロッパのどっかにいるはずだよ」

「ヨーロッパか……」

二人ともロケ地になる場所にいろいろと言っているために、消息がつかみにくい。

「よし、気を取り直して夕飯作るか!」

「うん、楽しみにしている」

妹の笑顔がまぶしくてやる気になった。

しかし、何で数年もしないうちに性格が変わったのだろうか……

今世紀最大の謎だ。

昼は、適当にカップラーメンを食べただけだ。

「この、チキンカレー味おいしいね!!」

「本当か……辛いだけなんだが…味が辛いつていうのも」

「これが、おいしいんだよ!」

「そうなのか」

妹との味覚の違いが分かった。

「チキンがカレーなんてダメだろ」

「兄さんつまらない……」

『ぐさっ』

カレーと辛れーをかけたのがつまらないと言われたのがショックだ。
渾身の出来だったのに。

食べ終わり。

また、作り始める。

そして、仕込みをしていたら。
あっという間に夕方になっていた。

「兄さん…本当にできるの??」

「ああ大丈夫だ!!」

しっかりと、豪華な食事になると思う。

『ピンポーン』

ドアホンの音が聞こえる。

「私出てくるね。」

千夏が走って行き、ドアを開けると

「こんにちは、ウルフ宅急便です。お荷物をお届けに参りました。
両羽 巧様で会っていますか」

「はい」

「こちらにサインを」

……。

…。

「ありがとうございます。」

ドアが閉まる音が聞こえ、箱を持った千夏がこっちに来た。

「兄さん。お父さんとお母さんからだよ」

「へえ〜珍しいな。やっぱりハロウィンだからかな？」

正方形の中ぐらいの箱を持っている。

「ご飯で来たから、食べたら。開けてみるか？」

「うん」

そうして、夕食が始まった。

「わぁ〜〜おいしいそう。」

「どうだ！」

ちょっと作りすぎた気がするが……いや、作りすぎだ。

これで当分、夕食を作らなくてもすむ。

その後、食べて食べて食べたが……会話は全くない。

「」「ごちそうさま……！」

「おいしかった」

「お粗末様です」

やっぱり、かなりの量が残ってしまった。

「それでは、開けてみよう！」

そういったとともに千夏が開け始めた。

「これは……ビデオとカボチャだな」

開けると、カボチャの中にビデオが入っていた。

「ハロウィーンと言えばそうだね。とにかくビデオ見てみよ！」

「ああわかった。」

ビデオデッキの中にいれて再生ボタンを押す。

背景がレンガで作られた家などが写っている。
その前には、

「ああ、お母さんとお父さん!!」

母さんと親父が写っていた。

「わはっはは、元気が、わが息子娘たちよ」

マッスルで、元氣120%のいつも通りの親父が写る。

「今、俺たちは、オーストリアにいる。」

オーストリアと言えば、音楽と芸術の都があるな。

「へえ〜〜〜オーストラリアにいるんだ。」

「千夏……“ラ”はいらないぞ」

千夏が真っ赤になり。

「間違えは誰にだってあるよ」

言い訳をする。

「Hey!! 巧に千夏。元氣にしてる!!」

元氣で活発な声であいさつしてくるのは、母さんだ。

「それで、今私たちがいる場所わかる??」

「いや、オーストリアだろ!」

つい、ビデオレターに突っ込んでしまった。

「巧！オーストリアだろっていう突っ込みはつまらんぞ」

「えっ。俺の突っ込みが読まれた！！」

「巧は、相変わらず。父さんには勝てないわね。正解を言ってあげて。」

「それはだな」

少し間を作って。

「ハローーウィーンにいるぞ！！俺達は！！」

「え……………」

これは、寒い。

「兄さんまさか……」

千夏も気づいたようだ。

「どうだ。父さん渾身のギャグは、ハロウィーンの日“ハローウィーン”にいるぞ。がはっはは」

笑い声が響く。

「さすが、笑いのツボ押さえてる。クスクス」

母さんまで一緒に笑っていた。

「それでは、また!!」

そうして、ビデオが終わった。

「何がしたかったんだ……二人とも……」

「さあ……?」

ていうか、親父と同じことをした俺は……

はずかしい!!

両羽家のハロウィンは、こうして幕を閉じた。

「タクミさん起きてください!!」

エリスの大声でタクミは起きた。

「エリスなんだ?」

「いや、だって何か無気力そうで死にかけた顔をしてたから」

「確かに……」

夢を思い出す。

「それでどうしたんですか?」

「寒いハロウィーンを過ごしたのさ」

「何ですか?」

「気にしないでいい」

懐かしく思い出したくない夢を見た。

番外編 「寒いハロウィンを過ごしたのさ」(後書き)

今日はハロウィンなので、そのネタの過去編をひとつ書きました。

今後も過去編があるかもしれないので期待してください。

話の途中でこの話を急に持ってきてすいません。

第十一話「これから、新しく仲間になったフェンリルだ。」

「まさか……魔王!？」

タクミがオオカミを見てあの声が聞こえたために魔王だといことがわかったが、エリスにはどうやらあの頭に響く声は聞こえないらしい。

「タクミさんどうしたんですか……?このオオカミさん……」

エリスは、少し体が震えている。

そして、タクミの後ろに下がって行った。

（おおお!!!エリス!より一層可愛くなってお母さんに似てきたな!）

またもや、タクミの頭の中に響く。

「魔王!!!どうことだ!これは!？」

タクミが痺れを切らして大声で言ったのはいいのだが

「え!!!魔王ってお父様なんですか!？」

エリスがすぐさま反応する。

（お前わしは魔王ではない!!!ただの狼だ。それにエリスには私の正体を知られたくないから黙っててくれないか??）

タクミは、そばに近づき耳元で話す。

「……何でだよ!？」

（理由はいいから、わしの名前はフェンリルだとも言っておけ!）

「ああ、もうわかったよ！」

「タクミさんどうしたんですか…？」

エリスが懐疑的な視線でこちらを見る。

「あはは、いやゝ忘れてたよ。魔剣と一緒に仲間になった。魔狼のフェンリルだ。」

タクミが堂々と嘘を言う。

それに乗ったフェンリルは

「ワンワン」

尻尾を震わせている。

「まったく、ワンワンって犬かよ。まったく魔王の威厳もなくそもないな。」

小声で嘆く。

「そうなんですか！よろしくねフェンリル！！」

エリスの目を輝かせて、フェンリルに向かって走って飛びつき抱きしめた。

「よく見たら可愛いかも〜！」

「ワン！ワン！ワオオオーーーーー！」

なんかフェンリルも喜んでいる。

「はぁー。本当に魔王なんかこいつ……」

親子のスキンシップなのだが・・・

とタクミは内心嘆く。勝手にやっててくれとタクミは思った。

「エリス。今日、ここで野営をするからみんなに伝えてくれ」

「はい、わかりました」

エリスは、タクミの言葉を聞いてテクテクと駆け足で軍のみんなに

伝えに行った。

タクミがフェンリルの方を見る。

「これは、どういうことだ？」

（そのままの意味だが）

やはり、頭の中に響く。

「この声は、俺にしか聞こえていなようだが何でだ??」

（それはだな…わしは、さっき言ったように肉体はないが魂は残っていた。それで今まで魔剣に縛られてたからな）

「縛られる??」

タクミは聞きなれない言葉に首をかしげる。

（魔剣というのは、意志がある。わしは、あまりにも魔剣に好かれてしまつて、死なせてくれなかったは!!がはは）

オオカミ自体は、息が淡いのだがタクミの頭の中には笑い声が響いて少し不愉快に感じる。

「事情は、わかった。それで、お前もついてくるのか??」

（もちろんだとも）

「そうかよ……どうせダメと言つてもついてくるのだろ!??」

（もちろん!!）

タクミは、ため息をつきながらフェンリルと一緒にエリスのもとへと歩いて行った。

そしてエリスの前に行き。

「これから、新しく仲間になったフェンリルだ。」

「ワンワン」

そういつて、フェンリルを紹介した。

一方の人族は……

「ゴルバ様、増援部隊が到着いたしました。」

「うむそうか。これで魔王軍を粉砕できるわ！！がっはは！！」
机を叩きながら豪快に笑っている。

そして、その横に控えていたグスバルもかすかに笑っていた。
そうして、人族は魔族への再戦へと意気込むのであった。

「ブリュンヒルドだっけ？こんなにも兵隊をくれるの？」

千夏は、陣織の中でブリュンヒルドに訪ねる。

「そうです。しかし、千夏様先ほど通りかかった部隊も魔王軍の所へ向かっていたようでしたがよかったのですか？」

兵力はざっと3千。

ブリュンヒルドが言っていたことは、ゴルバの部隊がちょうど横を通って進軍していったことだ。

進軍中の一人の兵に聞いてみればこれから魔王軍の所へ行くと聞けばなおさら部隊を徴集すればより多くの兵力になったからだ。

「たぶん、指揮系統がバラバラになって自滅すると思うからそれなら別々で行動したほうがいいからね。」

千夏は、はっきり堂々と返答。

「それなら、よろしいのですが……」

ブリュンヒルドは、不満そうな顔になる。

「それより、私の部下这件事情でいいのね？」

「はい、オーディン様がそうおっしゃったので……」

「そう……」

千夏は、このブリュンヒルドを信用できなかった。

千夏自体、オーディンと神族を信用していなかったが兄貴を連れ戻せれるというのがあったためにこの状況に乗ったのだ。

「まずは、魔王軍の実力がどれくらいなのか調べてみないと……」

「この戦い、魔王軍が勝つとでも」

ブリュンヒルドは、口をとがらせて言った。

「たぶんね。直感で感じるの……」

千夏は、自分の中で一番信頼が出来るのは知識でも友でもなく直観だと思っている。

あと、兄貴も……

「いや、違う……」

「どうしたんですか!？」

「何でもない。何でも……」

千夏は一瞬、信頼できるのが兄貴と思い浮かんだのを慌てて否定したのだ。

「そうですか……」

ブリュンヒルドは、渋々頷いたのだ。

「それでは、兄貴の腕前を拝見しましょうか……」

千夏は、これから戦場になる辺りを見て言った。

第十二話「ある意味、指揮官に向いているな」

魔王軍一行は、一晩明けて新しく合流した部隊との再編成を行っていた。

「こんなもんでいいんじゃないか？」

タクミが、リザードDジョージから編成の説明を受けて納得していた。

「エリス？ いいよな？」

「はい、いいんじゃないですか？」

頭にはてなマークが浮かんで首をかしげている。

「何で、首をかしげているんだよ。いちおう魔王軍の長おさだろ！」

エリスは、真実を言いたくないような顔をする。

そこで、リザードDジョージが答える。

「それは、今まで私が指揮をしていたのです。」

「それって、指揮していなかったのか今まで…？」

タクミがエリスの方を見るとエリスはあたふたして

「だって、今まで軍隊を指揮の仕方なんて勉強していなかったし…

…それに…それに！」

エリスは、それに、を連呼する。

「いや、エリス様は支えてとなっております。」

リザードDジョージがフォローをする。

「そうなんですよ！ 私は考えるのが苦手なんです。だから、だからジョージさんに任せてたんです！」

子犬のように叫ぶ。

タクミは、リザードDジョージを呼んで小声で話す。

「本当なのか？」

「本当です……エリス様は魔族の皆から守りたくなる存在らしいです。私もそうなんです。そのために、今残っているのは、エリス様をお慕いして守りたい根性がバリバリある奴らばかりなんですよ」

「ある意味、指揮官に向いているな」

リザードDジョージが大きくうなづく

「そうなんです。」

「エリスの才能だな、守りたくさせるようなのは」

「まったくもって」二

人が目の前でこそそと密談しているのが気になったエリスが大きな声で

「二人とも何しているんですか！！」

その声に、二人はビクツとして振り向いた。

「エリス様、これは必要事項を確認していたのです。」

二人は慌てて取ってつけたような言い訳をする。

「そうだ！エリス。必要なことだったんだ！」

タクミの中では本当に必要なことだった。

何でエリスの元に魔族がついていくのか不思議だったからだ。今回の話を聞いて納得してエリスの仁徳に感心した。

「そうなんですか……どうせ私はいつも邪魔者ですよ。だ。・・・
ぶつぶつ」

エリスが自己嫌悪しているのを見かねたタクミは、フォローを入れることにする。

「大丈夫だ。お前は立派な指揮官だ!!……………ある意味……………
しまった口が滑った。」

「ある意味って……ひどいすぎです」

エリスの目頭に水がたまっている。
もうすぐで決壊しそうだった。

タクミがやばいと思っていた瞬間。

「ガブツ」

「いった~~~~~」

タクミの腕を突然かまれ何ともいえない痛さを感じた。

「誰だ……ってフェンリルか!!」

腕をかんでいるのはフェンリルだった。

（おのれ~~~~貴様!わしの娘を泣かせるとは不屈き者め!やはり
亡き者しておくべきか!?ああ!）

「急にキレるな!泣かせていないだろ!!」

（問答無用!!）

さらに飛びつこうとしたのだが

「この野郎!調子に乗って!!」

タクミがフェンリルを振り払う。

二人は睨めあつて距離をとる。

「ガルル！」

「やってやる！」

二人の目線で火柱が立っていると、

「あはは、二人とも面白い」

急に隣で笑い出したのはエリスだった。

「タクミさんも犬みたい…クスクス」

お腹を抱えながら笑っている。

そんな笑っているエリスを見て二人ともケンカをするのをやめた。

そして眺めている。

楽しそうに笑っているエリスを…

「たつく、誰のためにやってると思っているんだ！」

タクミは、内心ぼやいた。

二人と一匹のほほえましい光景に突然釘を刺された。

「大変です。人族が来ました。兵力はおよそ2000後半です!!」

そいつは、息を切らしていた。

「そうか……もう来たか…この先に開けた土地でもあるか？」

「はい！ちょうど、そこで敵は陣を引いています。」

「タクミさん、そこって出口ですよ。そこを通らないといけません。」
「エリスが慌てる。」

「たぶん、俺たちの場所を特定されて先回りされたな…とりあえず、抜けるにはそいつらを叩かないといけないから全軍進軍するぞ！」
タクミの言葉と共に全軍が陣形を立て直す。

その合間にエリスはタクミに訪ねる。
あいま

「タクミさん大丈夫なんですか!？」

「ああ任せておけ!」

陣形を整える。進んでいる途中

タクミはフェンリルに近寄り話しかける。

「ダーインスレイブってどう使えるんだ？」

（ダーインスレイブが答えてくれるだろう。ただし、“20%”ぐらいの力にしておけ）

20を強調させる。

「何で20なんだ？」

（100で打つと世界が持たない。）

「まじでか!」

タクミは驚愕の事実にはビビり、とんでもない剣を手に入れたんだなと思った。

「なるほど…それなら単純な作戦で行くか!」

（わしは、口出しはしないがエリスを守るためなら何でもする。）
「期待しないでおくよ!」

タクミは、作戦を考えた。進んでいくとひけた場所に出る。

そこには、人族の部隊が横長く展開していた。

「俺たちを通さない気だな。」

「どうするんですが、中央突破にするんですか？」

エリスは今回の状況の打開策が浮かばなかったのでタクミに託す。

「そうすると、囲まれてあつという間にやられるな、前に俺たちが取った作戦と似ているな」

「どうするんですか!？」

「大丈夫だつて」

タクミは、余裕の顔をする。

「そうですか…」

エリスは、タクミのそんな顔を見て安心するのだ。

「何かタクミさんって、不思議だな」

自分に向かってささやいているエリスであった。

第十二話「ある意味、指揮官に向いているな」（後書き）

感想・評価など待っています。

第十三話「さて、こいつを試しに使って見ますか！」

「魔王軍。現れました。数は、およそ2000！前の戦いより増えています。」

今度も若い偵察兵だったのだが前の顔とは違っていた。

「そうか、あの森に隠れていた兵力と合流したのか……お前は、優秀だな！お前の前任がどうなったかは聞いておるだろうがそうならないようにがばってくれ！！」

「は、はい！！」

逃げるようにして去って行った。

前の戦いで偵察に出ていた兵は、戦闘終了後一晩建ったら謎の死に方をしたらしい。

噂には毒薬で殺されたと言われている。

理由は簡単でしっかりと敵の配置などを調べなかったからだろう。今回の偵察兵たちは必死なのだ。

そして、ゴルバを恐れていた。

偵察兵以外にも怖がっている兵はたくさんいた。

ゴルバは、そんな事には気づいていなかった。

「これで、魔王軍の命もつきたたわい。ぐはあは！！」

兵たちの心情も知らないで、陣内で大笑いしていた。

「ゴルバ様、これならいけます。今度こそ魔王軍の奴らを亡き者にできましょう。」

グスバルは、ゴルバの事をほめていた。

しかし、袖に隠れている手が震えていた。
内心では悔しのだ。

こんな野蛮な奴に俺が負けるとはそんなことを内心で考えてゴルバに向かつて同意をしていた。

「千夏様！危険です。」

「大丈夫だって！」

千夏とブリュンヒルドは、両軍が見渡せる位置にある山の上から見ていた。

「心配すぎ！たぶん両軍ともに伏兵なんていないでしょうし」

「どうしてそんなことが？」

千夏が当然かのように言っただけで、ため何でそんなことがいるのか不思議だった。

「両軍ともに伏兵に裂ける兵力なんてないだろうし、兄貴も今回は伏兵に回す時間なんかなかったから。」

「そうですか……ですが、護衛の兵も連れてこずに二人だけでここまで来るのは少々危険なのではないでしょうか……」

周りには、木が生い茂っており、ちょうどここだけが日の光を浴びれる場所だった。

そこには千夏とブリュンヒルドしかいなく千夏は双眼鏡的な物で状況を確認している。

「心配しすぎ。私とあなたが戦えば100人ぐらいは簡単に倒せるでしょうし」

「その通りですが……」

その100人という言葉には、何にも疑問を持たなかった。

ブリュンヒルドで本人もそれぐらいはいけるだろうと自負しているからだ。

「それにここなら……」

千夏がそつと呟きそうになった。

「何ですか!？」

ブリュンヒルドは、うまく聞き取れなかったために聞きかえしたが

「何でもない。」

千夏は誤魔化したのだ。

千夏の心の中では、もし負けてバカ兄貴が死にそうになっても助けに行けられる位置としてこの場所を陣取ったのだがそれは、心の奥隅へと隠した。

千夏は、心配そうにでも真剣にそんなような複雑な心境で戦場を見ていたのだ。

魔王軍がゴルバの部隊と対峙した。

陣形は、相手とまったく同じだった。

距離的には、弓をつつたらギリギリ届かない絶妙な位置にいる。

「どうしますか??？」

エリスは、先ほどからこの言葉を何分かおきにはタクミに聞いている。

「さっきから、そればかりだな！」

いい加減うつとうしいく感じられたのかエリスに向かって言う。

「だって、だって、心配なんです！絶対絶命じゃないですか！これからどうするんですかー！」

「ねちねち、ねちねち、うるさいなエリス」

「そりゃあ、こんな状況じゃうるさくもなりますって！」

子犬と猿が言い争いしているようだった。

「お二人とも静かにしてください。わが軍の士気を悪くするかもしれません。」

リザードD^{ジョージ}が突っ込む。

「すいません」

エリスは小さくなったように、しゅんとなる。

それを見たりザードD^{ジョージ}は慌てて

「いや、エリス様は悪くないんです。このへたれ勇者が悪いのです。」

「このへたれだと！お前…言ってもいいことと悪いことがあるぞ！」

口をとがらせてタクミは怒る。

「二人とも落ち着いて」

何やら先ほどの風景とはガラッと立場が変わったみたいだ。

エリスが子犬のように震えていると

そこに

（タクミ…！わしの娘を泣かせるな…！）

「ガルウー―」

いつの間にやらフェンリルがいた。

「何だ！？このクソ狼が！！」

そう言うフェンリルがとびかかり

「ガブッ」

「痛い、痛いつてギブギブ、ってか冗談抜きに痛い！！」
かまれている腕を必死に上下させながらタクミは叫んだ。

（これで懲りたか！）

そう言うフェンリルはまたどこかいつてしまった。

「たつく、なんであいつは、エリスを泣かせると会われるんだよ
！」

タクミは、かまれた腕をさすりながら言った。

「やっと落ち着きましたか…」

「誰のせいだと思ってるんだ！！」

「ひゃうう！」

タクミの大きな声にビクツとするエリス。

（お前…懲りてないようだな……）

タクミは、瞬間的に殺気を感じ取る。

その方に振り向くと目を光らせている動物がいた。

「エリス、大丈夫だ！俺に策があるから！」

怖くなって慌てて、そういつて取り繕うに言い。

ダーインスレイブを取り出した。

「さて、こいつを試しに使って見ますか！」

剣を抜いてダーインスレイブの全貌が見える。

紫色みたいな色に、中心は黒色の線が入っている。

デザインは実にシンプルで宝石みたいなものは一切なかった。

「これが……ダーインスレイブ……」

エリスは口をポカッと開けていた。

「さあ、行くぜダーインスレイブ。」

そうして、タクミはダーインスレイブを構えた。

第十四話「私が魔王に…あなたが勇者に…」

タクミは、ダーインスレイブを肩におき、歩き始める。

「ちょ、ちよつとタクミさん！魔剣を使うんですか！？」

「ああ、もちろん」

タクミは歩きながら返事をする。

元々、ダーインスレイブを使うことを前提にして作戦を考えていた。とはいっても、作戦は単純で、ダーインスレイブによるかく乱し、そしてそのまま一斉に突撃させるという作戦だ。

作戦としては物足りないだろうがシンプルこそいい時もある。実際の所それぐらいしか活路を見いだせないと思っっているタクミがエリスに返事をし。前に歩き出す。

そうすると何事かと魔族の兵たちはこちらを見てくる。

魔族の兵たちはよく見覚えのある剣を見て固まる。

それはそのはず、以前魔王が持っていた魔剣なのだから。

そして、その剣で何度も戦場を一変させてきたことを知っているからだ。

今、彼らの前には魔剣を持って現れたタクミに釘づけになる。

「ほんまにあんな男がああ剣をもってはるのか……」

そのちよつと横には、ゴブリンA^{ジョン}じつとタクミの方を見ている。

「いや、魔剣一つ持っただけでここまで様になるとは、さすがでっかな！！」

棍棒を片手に持ちながら言う。

そして、去っていくまで視線を離せなかった。

「ああ！！タクミさん！」
骨子がいた。

どんどんタクミは進んでいった。

タクミの進んでいる先は、誰もいなかった。

魔族たちはどういていたのだ。

その姿に魅せられていた。

かつて、自分たちの窮地を救ってくれた魔王と重ねていたのだ。
タクミが、エリスによって勇者として召喚させられた事を知っている人は少ない。

だから、魔王がまた再来したのかと思っている。

その姿に嬉しくて震えているのだ。

今まで魔王が死んでから、負ける一方だった。

この戦いは自分たちで終わるのか…

そんな気持ちでいっぱいだったのだが、ここに現れた一人の男に期待をしていた。

そう……魔王が現れたのだと。

タクミは、兵たちの一番前までくる。

そして、ダークインスレイブを持つ。

「タクミさん……なんだかっこいいです。」

エリスの気持ちは高ぶっていた。

そして、顔が熱くなつて赤くなるのを感じた。

それがどのような心情でそうだったのかはエリスにはわからなかった。

「タクミ殿が昔の魔王様みたいに見えましたよ……」

リザードD^{ジョーシ}は、懐かしむような顔をする。

「やっぱり、勇者じゃなくて魔王なのでは??」

リザードD^{ジョーシ}がエリスに言う。

「いえ、確かに勇者を呼びましたよ！ 私たち魔王軍の勇者を……」

エリス自身勇者とか魔王の定義なんて考えたことがなかった。

魔王とは……一般的な解釈では人に災いを与えたり、悪の道に陥れたりするのが常識なんだろうが。

エリス達魔族からして見れば救世主的な意味合いを持っている。

人は魔族を偏見し悪い奴なのだと決めつけている。

そして、それを迫害して追い出している。

実際に今までの戦いも土地を守る戦いなどが多くてそのために戦っていた。

だからと言って人族が全部悪いわけではない。

人族もいつかはここも取られるんじゃないかという恐怖に蝕むしばまれて
いる。

そうして、戦いは起こるのだ。

戦争なんて言うのはやらないのが一番だと思っただがそれでも起きて
しまう。

最初はどんな小さな喧嘩でもそれがやがて国、種族を巻き込んでし
まう。

言ってしまうえば国同士の喧嘩なのだ。

主義主張を旗印に戦っている。

決して頑固だからとかそんなのではない。

ただ、自分の意見を通すそんな簡単なことで戦争は起きている。

止める事なんてできないのだ。

そうして起きる戦争の中で英雄と呼ばれている人たちが出てくる。

それと同じように魔族の中では、魔王が英雄なのだ。

だから、勇者と魔王は根本的に意味は同じなのかもしれない。

ただ、敵味方の違いだけなのかもしれない。

そう感じているのだエリスは……

「タクミ殿は、魔王軍の勇者ですか……それなら、エリス様には魔王になつてもらわないと……」

リザードDがエリスに向かって優しく語りかける。

「私が魔王に??」

「そうです。私たち魔王軍の救世主となるべくお方なのです。エリス様は」

「私なんかが務まるわけじゃないじゃないですか……」

エリスは、下を向きつつ袖をつかんでじっと黙っていた。

「エリナが軍を引っ張っていけ、そして俺がお前の頭となって引っ張ってやるから心配するな。」

タクミが前に言った言葉を思い出した。

「私の頭になつて……引っ張ってやるか……」

そんなことを思い出して小声で一言つぶやいた。

そして、自分に向かってささやいた。

「私が魔王に……あなたが勇者に……」

エリスは、私が魔王という救世主になって、タクミが魔王軍の英雄という勇者になって、この世界をよりよくしたいと思った。

それは、エリスにとって初めての願いなのかもしれない。

エリスは、タクミと会った当時は戦争なんて嫌いでみんなで平和な場所ですらしていけばいいと思っていたが、

現実はそのなに甘くないことをこの数日で思い知った。

逃げても逃げても追ってくる人族の人達・・・

そして、逃げて行った魔族の人達・・・

いろいろなことを感じた、いや、こんなことはほんの少しなのかもしれない。

だから、エリスはもっと世界を見たいと思った。

魔王として……………

「ジョージさん…私は、魔王になります。みんな……………魔族とそして人族の魔王……………救世主になって見せますよ!!」

「そのお言葉をお待ちしておりました。」

リザードDが畏まるようにして臣下の礼をする。

（ようやく、決意してくれたか……………わが娘よ…いや、魔王!）

フェンリルは娘の言葉を聞いて安心したがどこかさみしくなった。

新たに決意をしたエリスと、

嬉しく思うリザード^{ジョージ}Dと、

さびしく思うフェンリルと

三者違う気持ちを抱えているが

三人ともタクミの雄姿を眺めている。

第十五話「あれっ!？」

タクミが、魔王軍の最前列まで来る。

「さて、このダインスレイブの力を見させえ貰いますか!？」
ダインスレイブを構える。

そうするとタクミの中に何とも言えない力が流れ込んでくる。

「使い方がわかる……」

頭の中に流れ込んできたのだ。

使い方などが一瞬でわかる。

そして、力をためていく。

ちよつとずつちよつとずつ……。

そうでもない、力が暴発してしまいそうなほどの魔力が流れ込んでくる。

タクミ自身、魔法なんかは使ったことはないし。

それに魔力なんてものを感じたことがなかったのだがそれでもわかる。

これが魔力なのかと……

とっても不思議な力が流れ込んでくるのが。

タクミの額に汗が出てくる。

熱いからとかではなく。

手巾に出てくる汗だ。

ダインスレイブの制御にはものすごい集中力がある。

今でも、ダーインスレイブを持って立っているのがやっとなほどだ。体がふらつきかけるがじっと耐える。

「あの、魔王はこんなものを平気で操ってたのか……バケ者だな！」少し魔王の事を見直してみたりしている。

周りに少しずつ魔力が漏れ始め。

地面を押しつぶす。

タクミは耐えている。

今すぐにでも倒れたいのだがプライドが許さない。

やっぱり男なら一度ぐらいはこういう経験をしたことがあるんじゃないかな。

タクミはそう思った。

「もうそろそろかな……」

それは感覚的に分かったことだ。

タクミ自身は集中して気づいていなようだが。

周りは魔力によってどんどんへこんでいつている。

それを見ている魔王軍もちょっとずつは下がっているが。

それでも見とれていた。

人族の部隊も同じだった。

何かが始まるとわかっていても、動けないでいる。

戦場が一人の男に注目する。

そして、見ているうちに迫力が増していき。

轟音が戦場一帯に巻き散った。

そして、タクミは尻餅をついた。

「……………え…まさか…外した!？」

魔族は啞然としている。

驚きをあらわにしていた。

別の意味での驚きを……………。

タクミのダークインスレイブの魔法は、斜め上の山に直撃していた。

いや、元山だったところに……………

それを見た人族は、最前線にいた兵達が逃げ始めた。
それを見た真ん中にいた部隊なども逃げ始めた。

あるものは叫び。

あるものは武器や鎧をすてて。

走って逃げる。

部隊は自然消滅となった。

未だに何が起きたのかわからない。

魔王軍は、人族が逃げて行くのをただ眺めていただけだった。

「すごいな……ダーインスレイブ。」

タクミは、尻餅をついたまま笑った。
自分の姿がおかしくて笑ったのだ。
タクミが外しただけなのにそれを見て人族が逃げている姿が滑稽だった。

人族は恐怖のあまり逃げて、魔族は呆然眺めるという面白い風景で戦いは幕を閉じたのであった。

エリスは、タクミが外した瞬間に。

「やっぱり、タクミさんはタクミさんですね…ぷう！あはは！！」
お腹を抱えながら笑った。

「タクミ殿が外した……」

リザードDは、口を開けたままでいる。

（「はぁ〜」この先が心配だ……）

フェンリルはため息をついた。

「可笑^{おか}しい。タクミさんが外しましたよー！」

エリスは、明るい笑顔をする。

リザードDは、エリスのこんな笑顔を久々に見たために昔を思い出しながら微笑んでいた。

そうして、エリスは見事に外して帰ってくる勇者を待った。

「はぁ~~~~。バカ兄貴は、バカ兄貴ね」

千夏は木の上から一部始終を見た感想はたった一言だった。

魔王軍の中から出てきた兄貴はかつこいいと思ってしまったのだが、ふたを開けたらびっくりってな感じで見事に期待に伝えてくれたという安心感に包まれた。

「……私ったら何を安心しているの？」

そう小声で自分につぶやいた。

そして

「撤退ね。ブリュンヒルド」

「しかし、今戦えばこちらに勝機があるのでは!？」

ブリュンヒルドは、千夏をにらみながら抗議したが。

その視線をまったく無視をし

「たぶん、兵力が同じだから最終的には士気で決まるところから。

無理ね!」

言いきつた。

「しかし……千夏様にはエクスカリバーがあるではありませんか。」

「そんなのはあっちだって魔剣を持っているんだからお相子よ。」

「しかし!」

ブリュンヒルドは、内心焦っているような顔をしながら反対するが、
・
・

「撤退して、オーデインに増援を貰わないと。あと、ブリュンヒルド。この判断は私が独断でしたことだからあなたには関係ない。わかった！」

「それなら……いいでしょう……」

ブリュンヒルドは渋々頷いたのだ。

千夏は、ブリュンヒルドがオーデインの事を敬愛していることを見抜いて先ほどの言葉を言ったのだ。

自分に責任がないとわかれば意見に賛同するだろうと気づいた。

千夏たちの部隊は何事もなかったようにひっそりと撤退したのであった。

一方、人族の部隊は混沌に包まれていた。

「撤退するな！！あんなのはつたりだ！！」

ゴルバは大声で叫んでいるのだが、
ゴルバの恐怖よりもダーインスレイブの威力の恐怖の方が勝ったのだ。

「くそつたれ！！使えん兵ばかりだな！！」

ゴルバは、馬の準備をさせて撤退の準備にかかった。
この状況では、戦うことはできないだろうと思つての決断だ。

「あの力は……」

グスバルは、魔剣の力に魅了された。

そして、感謝もした。

これで自分の番が来ると思ってたからだ。

グスバルは、にやつきながら戦場から離れていく。

夕日がきれいな中でそれぞれの思惑を胸に宿したまま戦場から去って行った。

第十五話「あれっ!？」（後書き）

誤字脱字があつた知らせてください。

感想・評価待っています。

第十六話「俺が勇者になって、お前…魔王を助ける!!」

太陽が山に隠れようとした頃にタクミはエリス達のもとに帰ってきた。

「ただいま!」

手を振りながら戻ってきたので、
エリスも手を振りながら

「おかえりなさい〜!!」

満面の笑みで返す。

「いや〜俺の作戦通りだった。」

「あれが、作戦!?!どう見てもコケて外したようにしか見えなかったんですけど…」

エリスは意地悪そうな視線でタクミを貶めようとした。
おとし

「まあ、最終的には敵が逃げてくれたんだし、結果オーライと言うことにしておきませんか…?」

手を頭の後ろに置き誤魔化すように早口で言う。

「タクミさんらしいと言えはらしいのですけどね。」

エリスは、タクミの姿を見てそういった。

「タクミ殿これからどうするんですか?」

リザードDジョーシがタクミを助けるかのごとく口をはさんだ。

「ああ、そうだな…まずは二日ここで休憩だな!」

「ここですか???人族の部隊に襲われる可能性はないのですか?」
「?」

リザード^{ジョー}Dは、心配そうな目で見てくるが

「たぶん、ダインスレイブの力に怖気づいて攻撃はしてこないだろう。」

「確かに…そうですね……タクミさんのおかげですよ……クスクス」
エリスは、口を手で押さえながら話している。
今にも吹き出しそうな勢いだった。

「お前……いつから俺に対して皮肉を言えるようになった!？」

「もちろん!魔王になってからです。」

タクミは、エリスが堂々とものを言ったことにも驚いたのだが、何より自分の事を魔王と言ったことにびっくりする。

「魔王……って、お前どうしたんだ!？」

タクミは、ここに来た時点でエリスが少し変わったことに気付いたのだが無視してきた。

しかし、今回の魔王発言でますます気になった。

「それはですね……私は魔王になる決意をしたんです。」

「魔王に!？」

「はい!」

タクミは、先ほどの言葉に耳を疑っていたのだが今回ははっきりと聞こえた。

私は魔王になると……

「なんで?？」

タクミは、出会った当初のエリスとは信じられない変貌ぶりだった。最初はただ、平和なところで暮らしたいと言っているだけだったのに今ではそんなことを言っていない。

「私には、夢があります。この世界を神族、魔族、人族関係なしに暮らせる。そんな世界を作ることです。そのために必要ならば私は魔王にだってなります。」

「お前から、世界を作るなんて聞けるなんて思いもよらなかったよ。でも。この先に待っているのは大変なことばかりかもしれないぞ!？」

タクミは、覚悟を確かめるために声を大きくしていった。

「大丈夫です。だから私は決意したのです。魔王になると……」

エリスのまっすぐとした視線を感じたタクミは、頷き。

「よし、わかった。それじゃあ、俺も勇者になってやるよ。お前の夢をかなえるための勇者に……」

「タクミさんが勇者ですか?頼りないですね。」

「うつせえ!お前こそ魔王なんかに向いてないわ!」

「何ですか……」

そしてどちらが先かわからないが笑い声が聞こえ始めた。二人して笑っている。

「俺が勇者になって、お前…魔王を助ける!!」
タクミ宣言する。

「はい、私も魔王になって世界を作るために頑張ります。だから、勇者さんは頑張ってて付いて来てください!」

「お前こそ、先にへこたれるなよ!」

「もちろん!」

エリスとタクミは、互いに握手をして、気持ちを確かめ合った。

こうして、一人の少女は、世界を平和で平等とするために魔王になることを決意し。

一人の少年はその魔王を守り世界をよりよくすると宣言したのだ。

こうして、魔王と勇者が手を組んだ。

太陽が隠れかけ暗くなりつつある夕暮れ時に世界をこの後灯していく大きな光りが出来た事を知る者は誰もいない。

その後暗くなり、今度は焚火の火で明るくなった。

（お前は調子に乗りすぎだ！）

タクミは一人草原に寝転んでいたところにフェンリルが来る。

「何だ〜フェンリル？」

（まったく、エリスが魔王になることを決意してくれたから今回の事は許してやる。）

「今回の事って何のことだ〜？」

タクミは、ダーインスレイブを使った疲れでへとへとだった。

（まあ、いい。それよりもダーインスレイブをもうちよつと使いこなさないと宝の持ち腐れだ。）

「うつせー」

タクミが寝転がっている横にオオカミが座っていると奇妙な光景だった。

（まあ、お前の気にすることでもないか。その内お前がしっかりと使えこなせる時が来るだろう。）

一言、意味深な言葉を残して去って行った。

タクミはフェンリルと別れた後にエリスに呼ばれた。

そしてエリスとタクミ、軍の隊長格の人たちが集まって今後について話し合うことになった。

「それで、これから、どうするんですか??」

エリスの第一声を発した。

なんともエリスらしい発言だなとタクミは思う。

タクミは一つ疑問が出てくる。

「そついや…ここんとこ忙しくて聞けなかったけど、魔王って元々領地持ってたのか?」

魔王は、あと一步で勝ちそうなところで負けたわけだからかなりの領地を持っているはずだと思ったタクミが聞く。

「はい、タクミさんには説明していなかったと思いますがこちら辺一帯はすべてお父様の領地だったんです。」

「なるほど……」

タクミは、少し間をおいて

「それじゃあ、魔王の旧領地はこの世界のどれくらいなんだ?」

「それは、五分の一です。その他にも魔族の領地はたくさんあるのですがお父様の領地は五分の一です。あと、タクミさんには言っていないことなんですけど、北の方は、もの凄い高い山があって行けないんです。だから、この土地は、山から南の事になりますね。」

ようするに、一つの大陸ではなく、北に高い山のある南の一部と言

うことだ。

まだまだ世界は広いんだなとタクミは思う。

「この土地の名前ってなんていうんだ？」

「ここを、トリオスと言います。」

「トリオスね……けど、世界はまだあるんだろ??」

別の世界からきたタクミからしてみればこちら辺り帯では小さいさ過ぎる。

「たぶん……」

「地理的な状況は分かったから、次に魔王軍の目指す目標が決まった。」

そのタクミの言葉に、魔族の隊長格の人たちがざわめきつく。

「なんですか??」

「まずは、旧魔王領の奪還だ!」

「なるほど、まずは、地盤固めてからですか？」

頭に電球が光ったエリスは納得する。

「そうだ。」

「でも、大丈夫なんでしょうか?最近では大分、人族が入って来ていますし、国境沿いの砦も頑丈ですよ……」

しおらしくなり言う。

「大丈夫だって!」

「何ですか?」

「そりゃあ」

タクミが時間を置き。

「始まり方でエピソードが見えてくるからだ」

「エピソード？」

エリスが首をかしげる。

「始まりが良ければだいたい、あとはうまくいくってもんだ！」

「そうですか？」

エリスは信じていないような感じで首をかしげて見せるが

「そうだ！」

タクミは言い切る。

次に魔王と勇者は、旧領地の奪還に乗り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7366x/>

魔王と勇者のタクティクス

2011年11月8日19時35分発行